

地域高齢者のプロダクティブな活動への関与と well-being の関連

オカモト ヒデアキ
岡本 秀明*

目的 本研究では、地域高齢者のプロダクティブな活動と well-being の関連について横断調査結果から明らかにすることを目的とした。

方法 大阪市に居住する高齢者1,500人を対象にした郵送調査を実施し、576人を分析対象にした。プロダクティブな活動は、有償労働、家庭内無償労働、家庭外無償労働の3領域と、プロダクティブな役割の数により測定した。Well-being は、生活満足度 (LSIK) と主観的健康感の2指標を用いた。分析は、well-being の各指標を従属変数、プロダクティブな活動それぞれを独立変数、基本的な属性や社会関係をコントロール変数として多変量解析を用いて男女別に行った。

結果 有償労働は、女性の生活満足度、男性と女性の主観的健康感と正の関連がみられた。家庭内無償労働は、男女ともに well-being の指標との関連がみられなかった。家庭外無償労働は、女性の生活満足度および主観的健康感と正の関連がみられた。プロダクティブな役割の数は、男性の主観的健康感、女性の生活満足度および主観的健康感と正の関連を示していた。

結論 女性では、家庭内無償労働を除くプロダクティブな活動が概して well-being を高める可能性が示唆された。男性では、有償労働への従事や、プロダクティブな役割を多く持つことが主観的健康感を高める可能性が示唆された。特に女性の高齢者に対し、家庭外でのプロダクティブな活動に関与しやすいような環境整備を進めることにより、本人の well-being の向上とともに、地域社会に活動による利益がもたらされる可能性が考えられる。

Key words : 地域高齢者, プロダクティブ・エイジング, プロダクティブな活動, ウェルビーイング, 有償労働, 無償労働

1 はじめに

プロダクティブ・エイジング (productive aging) は、老いを依存性などのネガティブなものではなく生産性 (productivity) という観点から積極的にとらえ、高齢者が有する生産性を社会がより積極的に活用するべきであるとする概念である¹⁾。介護や社会的コストを要するなど、依存性ばかりに着目するような高齢者に対するこれまでの偏った見方を払拭しようとしたこの概念は、大きな関心を集めるようになった。

プロダクティブ・エイジングをとらえる指標としてプロダクティブな活動 (productive activities) があげられ、この活動には有償労働 (paid work) だけではなく無償労働 (unpaid work) も含まれる²⁾。プロダクティブな活動を有償労働のみとする偏ったとらえ方をすると、定年退職の影響などにより、高

齢者の生産性は年齢とともに急激に低下するものと示される。しかしながら、無償労働に目を向けると、高齢者の生産性は年齢が上昇しても低下はゆるやかであり、活動によってはおおむね安定的なものもあることがわかる^{3~5)}。

プロダクティブな活動の定義について、Herzog³⁾は、有償無償にかかわらずモノやサービスをうみだす活動で、家事、子どもの世話、ボランティア、家族や友人への支援のような活動を含むとしている。高齢者が有償労働やボランティアを行う能力を高めるために行う訓練なども含む⁶⁾とする、より広義にとらえた定義もみられる。

これまで、高齢者のさまざまな活動と well-being の関連を検討した研究が数多く報告されてきたが、高齢者の活動をプロダクティブな活動という観点からとらえて検討したものは少ない。Baker⁷⁾は、プロダクティブな活動を活動数と活動時間の2つの変数でとらえて検討し、活動時間は生活満足度と幸福感のそれぞれと正の関連がある、活動数には関連がない、活動数と活動時間はいずれも抑うつとの関

* 和洋女子大学生生活科学系
連絡先：〒272-8533 千葉県市川市国府台 2-3-1
和洋女子大学生生活科学系 岡本秀明

連がないことを報告している。Hinterlong ら⁸⁾の研究では、プロダクティブな活動への関与の有無とプロダクティブな役割数は、双方とも、主観的健康感および生活機能と正の関連がある、抑うつ傾向と関連がないとしている。McIntosh ら⁹⁾は、プロダクティブな活動と肯定的および否定的感情との関連を性や人種別に検討している。性別に検討した結果として、有償労働および宗教的な組織等での無償労働は男女ともに関連がない、宗教的ではない組織等での無償労働は男性に肯定的感情と正の関連がある、家庭外でのインフォーマルな無償労働は女性に肯定的感情との正の関連および否定的感情との負の関連があることを報告している。杉原¹⁰⁾は、生活満足度との関連について、有償労働は男性において正の関連がある、家族や親族への無償労働は男女とも負の関連がある、他人への支援提供は男性において正の関連があるとしている。

高齢者のプロダクティブな活動と well-being の関連をみる際に、社会関係や組織・集団への参加などの社会的側面^{11,12)}をコントロールして検討した研究は、数が少ないが、Baker ら⁷⁾、Hinterlong ら⁸⁾によるものがある。しかしながら、同様の検討方法により男女別に検討した研究となるとあまりみられない。また、多重な役割 (multiple roles) を役割数で示して well-being との関連を検討した研究はあるが、その役割数をプロダクティブなものに特化した研究は極めて少ないことが指摘されている⁸⁾。多重な役割とは、個人が、たとえば従業員、親、介護者、ボランティアなどの社会的な役割をいくつか担っていることであり^{13,14)}、この多重な役割を担うことによる健康状態などへの影響が研究されている^{8,14)}。多重な役割をもつ者は well-being が高まるという role enhancement の視座というものがあり^{13,14)}、Hinterlong ら⁸⁾は、プロダクティブな役割への関与と健康の関連を検討した研究でこの視座を援用している。

わが国の状況に目を向けると、少子高齢化が急速に進行して社会の活力低下が懸念されるなか、急増する定年退職者をはじめとする高齢者の活力の活用方法が検討されており、プロダクティブな活動に関する研究が求められている。しかしながら、プロダクティブな活動に関する実証的な研究自体が極めて少ない状況にある。プロダクティブな活動を従属変数とし、その関連要因を検討した岡本⁵⁾は、今後はプロダクティブな活動を独立変数としたモデルを用いて、活動により高齢者が享受する効果を明らかにする研究もすすめていく必要性を指摘している。

以上のような背景から、本研究では、横断調査結

果を用いて、社会的な側面を含めた交絡要因をコントロールしたうえで、地域高齢者のプロダクティブな活動と well-being の関連を男女別に検討することを目的とした。その際には、Hinterlong ら⁸⁾の研究を参考にプロダクティブな活動への関与をプロダクティブな役割数でとらえて well-being との関連の検討も行った。

なお、高齢者のプロダクティブな活動と well-being との関係性を検討する際のモデルは、プロダクティブな活動を行うことにより well-being が向上するというモデルのほかに、well-being が高い高齢者がプロダクティブな活動を行う傾向にあるというモデルも考えられるであろう。本研究では、先述した先行研究と同様に、前者のモデルを用いて検討した。

II 研究方法

1. 対象者

大阪市居住の65～84歳の高齢者1,500人を選挙人名簿により無作為抽出し、2005年4月から5月に自記式調査票を用いた郵送調査を実施した。大阪市24区のうち8区を無作為抽出し、各8区の65～84歳の人口割合に比例して計1,500人となるように抽出した。有効回答数は771人(51.4%)であった。分析対象者は、このうち、代理回答ではない、年齢、性別、家族形態、プロダクティブな活動、主観的健康感に欠損値がない、生活満足度の9項目のうち欠損値が2項目以内という全条件を満たす者としたため、576人となった。この576人(男性290人、女性286人)の男女別の基本属性について、平均年齢は、男性71.9歳、女性72.5歳、家族形態は、男性が独居14.5%、夫婦のみ40.0%、その他45.5%、女性が独居31.8%、夫婦のみ32.2%、その他36.0%であった。

調査の際は、協力ができない場合は回答せずによること、回答データは統計的処理を行い個人が特定されないこと、協力が得られる場合は調査票を無記名で返送を依頼したいことを協力依頼文書に示したため、本研究における倫理的問題点はないと判断している。

2. 調査項目

各変数の分布は表1に示した。以下に各変数について説明する。

1) プロダクティブな活動

プロダクティブな活動への関与は、プロダクティブな活動3領域それぞれの活動頻度とプロダクティブな役割数の2側面にとらえた。

活動3領域は、先行研究^{8,10,15)}を参考に、有償労働、家庭内無償労働 (unpaid work at home)、家庭外無償労働 (unpaid work outside the home) の3領

表1 各変数の分布と男女間比較

	人 (%) または平均値 ± SD		検定
	男性 (n=290)	女性 (n=286)	
[プロダクティブな活動]			
有償労働			
中央値 (25, 75パーセンタイル)	0(0, 260)	0(0, 0)	***
レンジ (年換算回数)	0~260	0~260	
家庭内無償労働			
中央値 (25, 75パーセンタイル)	78(18, 260)	260(260, 261.5)	***
レンジ (年換算回数)	0~520	0~520	
家庭外無償労働			
中央値 (25, 75パーセンタイル)	0(0, 0)	0(0, 18)	n.s.
レンジ (年換算回数)	0~520	0~598	
プロダクティブな役割数			
中央値 (25, 75パーセンタイル)	2(1, 3)	2(1, 3)	n.s.
レンジ (点)	0~6	0~6	
[Well-being]			
生活満足度			
平均値 ± SD	3.8 ± 2.1	3.8 ± 2.3	n.s.
主観的健康感			
健康群	204(70.3)	188(65.7)	n.s.
非健康群	86(29.7)	98(34.3)	
[コントロール変数]			
年齢			
平均値 ± SD	71.9 ± 4.9	72.5 ± 5.2	n.s.
家族形態			
独居	42(14.5)	91(31.8)	***
夫婦のみ	116(40.0)	92(32.2)	
その他	132(45.5)	103(36.0)	
暮らし向き			
平均値 ± SD	2.8 ± 0.9	2.9 ± 0.9	n.s.
IADL			
全項目自立	253(87.5)	250(87.7)	n.s.
非自立項目あり	36(12.5)	35(12.3)	
親しい友人・仲間数			
平均値 ± SD	2.1 ± 1.4	2.3 ± 1.3	n.s.
集団的活動への参加			
あり	169(59.3)	185(67.0)	n.s.
なし	116(40.7)	91(33.0)	

注1: 各項目で欠損値がある場合は合計数が n に満たない場合がある。

注2: 検定は各変数の男女間の比較。プロダクティブな活動の4変数は Mann-Whitney の U 検定, 主観的健康感, 家族形態, IADL, 集団的活動への参加は χ^2 検定, その他の変数は t 検定を用いた。

***: $P < .001$, **: $P < .01$, *: $P < .05$, n.s.: 有意差なし

域を6項目で測定した⁵⁾。有償労働の領域は、収入のある仕事の1項目、家庭内無償労働の領域は、自宅で行う家事(掃除・洗濯・炊事)、同居家族への世話(看病・介護・孫の世話)の2項目、家庭外無償労働の領域は、別居親族への支援(家事・手伝い・看病・介護・孫や乳幼児の世話)、友人や近隣への支援(家事・手伝い・看病・介護・乳幼児の世話)、ボランティアの3項目とした。各項目につい

て、過去1年間の活動状況を回答のしやすさも考慮し、「週に3回以上(260)」、「週に1~2回程度(78)」、「月に1~2回程度(18)」、「半年に2~3回程度(5)」、「年に1~2回程度(1.5)」、「まったくしていない(0)」の6つの選択肢でたずねて把握した(カッコ内の数値は分析の際に付与した年換算回数)。活動領域ごとに、構成項目の年換算回数を加算した。そして男女それぞれの分布を考慮しながら

表2 3群化したプロダクティブな活動4変数の分布

	人 (%)	
	男性 (n=290)	女性 (n=286)
有償労働 (レンジ)		
低位群 (0)	170(58.6)	227(79.4)
中位群 (1.5~78)	36(12.4)	21(7.3)
高位群 (260)	84(29.0)	38(13.3)
家庭内無償労働 (レンジ)		
低位群 (男:0~19.5;女:0~96)	98(33.8)	44(15.4)
中位群(男:23~156;女: 260~278)	83(28.6)	178(62.2)
高位群(男:260~520; 女:338~520)	109(37.6)	64(22.4)
家庭外無償労働 (レンジ)		
低位群 (男:0;女:0)	159(54.8)	148(51.7)
中位群 (男:1.5~15; 女:1.5~18)	62(21.4)	76(26.6)
高位群 (男:18~520; 女:19.5~598)	69(23.8)	62(21.7)
プロダクティブな役割数		
低位群 (0~1点)	103(35.5)	102(35.7)
中位群 (2~3点)	142(49.0)	140(49.0)
高位群 (4~6点)	45(15.5)	44(15.4)

注1:レンジの数値は各群における合計された活動の年換算回数である。

おおむね三等分して「高位群」,「中位群」,「低位群」の3群に分けた。各活動領域における3群の年換算回数のレンジは,表2に示したとおりである。なお有償労働は,男女ともに回答が「週に3回以上」と「まったくしていない」の選択肢が多かったため,3群に分ける基準は結果的に男女とも同じとなった。

役割数は,6項目の各活動において活動あり(年に1~2回程度以上)の者を役割ありとみなして1点,活動なしの者を役割なしとみなして0点を配点して加算した⁸⁾。役割数の男女の得点分布は類似していたため,結果的に男女とも同じ基準で分けることになり,4~6点を「高位群」,2~3点を「中位群」,0~1点を「低位群」とした。

上記のように,プロダクティブな活動への関与とwell-beingの関連を検討するにあたり,この活動の変数を連続変数ではなく3群に分けた主な理由を述べる。第1に,有償労働であれば「まったくしていない者」と「週に3回以上」の回答が多い,家庭外無償労働であれば活動なしに該当する者が半数程度と多いように,分布が正規分布から大きくはずれたものが多かったためであった。これに関して,先行研究により,家事以外の無償労働や有償労働に関与していない高齢者の割合が比較的多いことか

ら^{8~10)},プロダクティブな活動への変数は概して正規分布から外れることが予想された。しかしながら,調査票作成の際には,活動頻度を年換算回数で把握した基礎データも得られるように回答選択肢を設定した。第2に,年換算のボランティア活動時間が一定時間を超えると主観的健康感を高める効果がなくなり逆に低下させるという知見があり¹⁶⁾,わが国でもプロダクティブな活動の種類によってはその関与の程度とwell-beingの関わりが線型ではない可能性が考えられるためであった。なお,単に2群に分けるとデータが有する情報量が減少してしまうため,3群に分ける方法をとった¹⁷⁾。

2) Well-being

高齢者研究におけるwell-beingの測定は,生活満足度などの主観的幸福感,抑うつ,主観的健康感などの心理的well-beingの指標がよく使用されている^{14,18,19,20)}。本研究では,生活満足度(LSIK²¹⁾)と主観的健康感(非常に・まあ健康=1,あまり・まったく健康でない=0)の2つの指標を用いた。生活満足度(9点満点)を構成する9項目のうち欠損値が2項目以内の対象者は,回答傾向に基づき推定値(欠損値が2項目の場合:推定値=得点×9/7)を算出して分析に加えた。なお,本研究における生活満足度(LSIK)のクロンバックの α 係数は,0.69であった。

3) コントロール変数

コントロール変数は,年齢,家族形態(独居=0とした2つのダミー変数),暮らし向き(大変ゆとりあり=5~大変苦しい=1),IADL(自立=1,非自立=0),親しい友人・仲間数(7人以上=4,5~6人=3,3~4人=2,1~2人=1,いない=0),集団的活動への参加(参加あり=1,参加なし=0)とした。IADL自立は,預貯金の出し入れ,日用品の買い物,バスや電車の利用の3項目すべてが自立している者,集団的活動への参加ありは,町内会・自治会,老人クラブ,趣味の会などの仲間うちの活動の3項目のうちいずれかに参加している者とした。

3. 分析方法

プロダクティブな活動の男女間比較は,3群化する前の変数を使用し,Mann-WhitneyのU検定を行った。3群化した変数は,4変数のうち2変数において男女間でカテゴリーのレンジが異なっていたためであった。その他の変数の男女間比較は,後述の多変量解析において連続変数として扱ったものはt検定,離散変数は χ^2 検定により行った。

プロダクティブな活動への関与とwell-beingの関連を検討する分析は,第1に,活動3領域とwell-beingの関連を検討するため,各活動領域(低位群

=0とした2つのダミー変数)を独立変数,生活満足度および主観的健康感それぞれを従属変数とする分析を行った。第2に,プロダクティブな役割数とwell-beingの関連を検討するため,役割数(低位群=0とした2つのダミー変数)を独立変数,生活満足度および主観的健康感それぞれを従属変数とする分析を行った。従属変数を生活満足度とした分析は重回帰分析,単項目で測定した主観的健康感とした分析は二項ロジスティック回帰分析を使用した。なお,生活満足度を高群と低群の2群にカテゴリー化し,主観的健康感の分析方法にあわせ,本研究の多変量解析をすべて二項ロジスティック回帰分析に統一する方法もあろう。しかしながら,生活満足度は連続変数であり,2群に変換してしまうとデータの情報が大きく失われてしまうため¹⁷⁾,生活満足度を用いた分析では重回帰分析を採用した。分析は男女別に行い,先述したコントロール変数をすべて投入した。分析に同時に投入した独立変数およびコントロール変数間の相関係数(スピアマンの順位相関係数)を確認したところ,相関が高かった「親しい友人・仲間数」と「集団活動への参加」の変数間においても0.4程度(男性0.411,女性0.366)であったため,同時に投入して分析を行っても問題はないと判断している。

III 研究結果

プロダクティブな活動の男女間比較をした結果,有償労働と家庭内無償労働に有意差が認められた。有償労働は,女性と比較して男性のほうが,家庭内無償労働は,男性と比較して女性のほうが行っている傾向がみられた。Well-beingの2つの指標は,男女間に有意差はなかった。コントロール変数は,家族形態に有意差がみられ,男性と比較して女性のほうが独居の割合が高い傾向にあった(表1)。

プロダクティブな活動3領域とwell-beingの関連の分析結果は,以下のとおりである。生活満足度を従属変数とした重回帰分析の結果(表3),男性において有意な関連がみられた活動領域はなかった。女性においては,まず有償労働に有意な関連がみられ,基準とした低位群と比較して高位群のほうが生活満足度が高かった($\beta=0.120, P<0.05$)。家庭外無償労働においても有意な関連がみられ,基準とした低位群と比較して高位群のほうが生活満足度が高かった($\beta=0.168, P<0.01$)。

主観的健康感を従属変数とした二項ロジスティック回帰分析の結果は,表4に示した。男性においては,有償労働のみに主観的健康感との有意な関連がみられ,基準とした低位群と比較して中位群のオッズ比は3.62(95%CI: 1.23-10.64, $P<0.05$),高位群

表3 プロダクティブな活動3領域とwell-being(生活満足度)の関連

	男 性			女 性		
	β	β	β	β	β	β
有償労働						
中位群	-.003	—	—	-.026	—	—
高位群	.082	—	—	.120*	—	—
家庭内無償労働						
中位群	—	-.097	—	—	.105	—
高位群	—	.022	—	—	.038	—
家庭外無償労働						
中位群	—	—	.090	—	—	.087
高位群	—	—	.035	—	—	.168**
年齢	-.042	-.063	-.064	-.107	-.126*	-.096
家族形態						
夫婦のみ	.242**	.253**	.233**	.083	.096	.111
その他	.188*	.186*	.190*	.170**	.205**	.185**
暮らし向き	.311***	.327***	.325***	.406***	.423***	.423***
IADL	.149**	.157**	.136*	.227***	.225***	.223***
親しい友人・仲間数	.179**	.189**	.190**	.105	.107	.082
集団的活動への参加	-.015	-.019	-.035	.032	.037	-.001
調整済 R ²	.253***	.259***	.254***	.297***	.289***	.304***

***: $P<.001$, **: $P<.01$, *: $P<.05$

のオッズ比は4.09 (95%CI: 1.75-9.54, $P < 0.01$) であった。女性においては、有償労働と家庭外無償労働の2領域に主観的健康感と有意な関連がみられた。有償労働では、基準とした低位群と比較して高

位群のオッズ比は4.21 (95%CI: 1.18-15.05, $P < 0.05$) であった。家庭外無償労働では、基準とした低位群と比較して中位群のオッズ比は2.58 (95%CI: 1.24-5.40, $P < 0.05$)、高位群のオッズ比は4.74

表4 プロダクティブな活動3領域と well-being (主観的健康感) の関連

	男 性		
	オッズ比 (95%CI)	オッズ比 (95%CI)	オッズ比 (95%CI)
有償労働			
中位群	3.62(1.23-10.64)*	—	—
高位群	4.09(1.75-9.54)**	—	—
家庭内無償労働			
中位群	—	0.87(0.40-1.91)	—
高位群	—	0.77(0.37-1.59)	—
家庭外無償労働			
中位群	—	—	1.77(0.76-4.09)
高位群	—	—	0.95(0.44-2.02)
年齢	0.97(0.91-1.03)	0.94(0.89-1.00)	0.94(0.88-1.00)*
家族形態			
夫婦のみ	1.78(0.71-4.43)	1.95(0.80-4.78)	2.05(0.83-5.05)
その他	0.84(0.34-2.08)	1.09(0.45-2.61)	1.17(0.49-2.76)
暮らし向き	1.48(1.01-2.17)*	1.60(1.12-2.29)**	1.60(1.12-2.29)**
IADL	9.73(3.68-25.75)***	9.35(3.65-23.97)***	8.17(3.26-20.47)***
親しい友人・仲間数	1.22(0.96-1.55)	1.30(1.03-1.65)*	1.31(1.03-1.65)*
集団的活動への参加	0.84(0.43-1.67)	0.80(0.41-1.55)	0.74(0.37-1.46)
モデル χ^2 (df)	75.81(9)***	60.78(9)***	62.42(9)***
	女 性		
	オッズ比 (95%CI)	オッズ比 (95%CI)	オッズ比 (95%CI)
有償労働			
中位群	0.84(0.29-2.44)	—	—
高位群	4.21(1.18-15.05)*	—	—
家庭内無償労働			
中位群	—	1.65(0.70-3.88)	—
高位群	—	1.93(0.67-5.62)	—
家庭外無償労働			
中位群	—	—	2.58(1.24-5.40)*
高位群	—	—	4.74(1.91-11.76)**
年齢	0.96(0.91-1.02)	0.95(0.90-1.01)	0.98(0.92-1.04)
家族形態			
夫婦のみ	2.54(1.24-5.23)*	2.32(1.10-4.89)*	3.40(1.60-7.21)**
その他	4.09(2.00-8.37)***	4.01(1.86-8.65)***	4.95(2.35-10.43)***
暮らし向き	1.59(1.12-2.27)*	1.67(1.19-2.35)**	1.69(1.19-2.39)**
IADL	8.41(3.21-22.01)***	7.93(2.96-21.27)***	8.26(3.09-22.08)***
親しい友人・仲間数	0.88(0.69-1.14)	0.89(0.70-1.15)	0.85(0.65-1.09)
集団的活動への参加	1.78(0.92-3.44)	1.87(0.97-3.60)	1.34(0.68-2.65)
モデル χ^2 (df)	65.57(9)***	60.45(9)***	73.12(9)***

*** : $P < .001$, ** : $P < .01$, * : $P < .05$

CI : 信頼区間

(95%CI: 1.91-11.76, $P < 0.01$) であった。

プロダクティブな役割数と well-being の関連の分析結果は、以下のとおりである。生活満足度を従属変数とした重回帰分析の結果は、表5に示した。男性では、役割数と生活満足度の有意な関連はみられなかった。一方で、女性では有意な関連がみられ、基準とした役割数の低位群と比較して高位群のほうが生活満足度が高かった ($\beta = 0.126$, $P < 0.05$)。

表5 プロダクティブな役割数と well-being (生活満足度) の関連

	男性	女性
	β	β
プロダクティブな役割数		
中位群	.064	.093
高位群	.061	.126*
年齢	-.054	-.107
家族形態		
夫婦のみ	.232**	.090
その他	.182*	.162**
暮らし向き	.317***	.427***
IADL	.140*	.228***
親しい友人・仲間数	.176**	.087
集团的活動への参加	-.022	.017
調整済 R ²	.250***	.295***

*** : $P < .001$, ** : $P < .01$, * : $P < .05$

表6 プロダクティブな役割数と well-being (主観的健康感) の関連

	男性	女性
	オッズ比(95%CI)	オッズ比(95%CI)
プロダクティブな役割数		
中位群	2.03(1.05-3.92)*	1.89(0.99-3.62)
高位群	3.19(1.08-9.45)*	7.94(2.34-26.94)**
年齢	0.95(0.89-1.01)	0.97(0.92-1.03)
家族形態		
夫婦のみ	1.71(0.69-4.24)	2.72(1.32-5.64)**
その他	0.96(0.40-2.31)	3.74(1.80-7.78)***
暮らし向き	1.51(1.05-2.16)*	1.73(1.21-2.48)**
IADL	8.60(3.39-21.84)***	8.94(3.29-24.29)***
親しい友人・仲間数	1.21(0.94-1.54)	0.83(0.64-1.07)
集团的活動への参加	0.74(0.38-1.47)	1.51(0.77-2.98)
モデル χ^2 (df)	66.81(9)***	72.98(9)***

*** : $P < .001$, ** : $P < .01$, * : $P < .05$

CI : 信頼区間

主観的健康感を従属変数とした二項ロジスティック回帰分析の結果、役割数と主観的健康感の有意な関連は男女ともにみられた(表6)。男性では、基準とした役割数の低位群と比較して中位群のオッズ比は2.03 (95%CI: 1.05-3.92, $P < 0.05$)、高位群のオッズ比は3.19 (95%CI: 1.08-9.45, $P < 0.05$) であった。女性では、基準とした役割数の低位群と比較して高位群のオッズ比は7.94 (95%CI: 2.34-26.94, $P < 0.01$) であった。

IV 考 察

本研究では、地域高齢者におけるプロダクティブな活動3領域およびプロダクティブな役割数と well-being の関連を検討するために、多変量解析を用いて男女別に分析した。

就業と well-being の関連について、Gall ら¹⁸⁾、Kim ら²²⁾は、これまでの研究に関して、正の関連がある、負の関連がある、関連がないといういずれの知見も複数あるとまとめている。わが国でも、正の関連がある²³⁾、関連がない²⁴⁻²⁶⁾、男性に正の関連がある¹⁰⁾、家業の手伝いをしている女性に負の関連がある²⁷⁾などの知見がみられる。先行研究の結果が一致していない理由として、退職後どのくらい経過してから調査をしたのか、退職後の生活に適應できる資源をどの程度有しているかなどの複雑さに加え、収入などの変数を統計学的にコントロールすると仕事と生活満足度などの指標との関連の強さが減少することなどが指摘されている^{18,28)}。本研究では、有償労働と well-being の関連は、男性では主観的健康感とのあいだに正の関連、女性では主観的健康感ならびに生活満足度とのあいだに正の関連が示される結果となった。

本研究で、有償労働と主観的健康感の正の関連が男女ともにみられたことに関して、以下のことが考えられる。65歳以上の不就業者が就業を希望する理由をみると、男女とも健康を維持したいとの回答割合が最も高い²⁹⁾。平成16年高齢者就業実態調査によると³⁰⁾、就業者の主な就業理由は経済上の理由が圧倒的に多いが、健康上の理由(健康に良いからなど)との回答もみられ、その割合は55~59歳、60~64歳、65~69歳と年齢階級があがるとともに増加している。高齢者は若年者と比較して、就業を健康維持という観点からとらえる傾向が強くなる。そのため有償労働は、社会に貢献しながら健康維持にも役立っているという肯定的な感覚をもたらし、主観的健康感を高めた可能性が考えられる。

有償労働と生活満足度の正の関連は、女性にみられた。杉澤らは³¹⁾、男性中心社会のなかで努力して

就労に励んできた女性の定年退職は役割喪失によるストレスが大きい可能性が指摘されているため、十分な調査対象者数を確保して検討すると、女性の定年退職は男性よりも否定的影響を示すかもしれないとしている。本研究は、縦断的研究により定年退職の影響を検討したものではないが、杉澤らの指摘もふまえて結果を検討すると、女性の継続的な就労が一般的とはいえない時代を過ごした女性にとって、高齢期においても有償労働に関与できているという価値は大きく、生活満足度の上昇につながった可能性が考えられる。

家庭内無償労働と well-being の関連は、男女ともにみられなかった。家事的側面を示す変数はいずれも生活全体の満足度と関連がないとの報告²⁷⁾、家族や親族に対する無償労働は生活満足度と負の関連がみられたとの報告¹⁰⁾、家庭内無償労働は終わることなく続き、周囲から評価されることもあまりないために精神的健康を低める傾向にあるとの指摘がある³²⁾。一方で、家事・庭仕事が幸福感と正の関連があったとの知見もみられる³³⁾。しかしながら、先行研究を概観すると、家庭内無償労働が well-being の上昇には寄与していないことを示すものがほとんどであり、本研究も類似の結果を示していた。

家庭外無償労働と well-being の関連は、男性では有意な関連はみられなかったが、女性においては主観的健康感ならびに生活満足度とのあいだに正の関連がみられた。先行研究は測定された活動内容が本研究と同一ではないが、女性の家庭外でのインフォーマルな無償労働は、肯定的な感情と正の関連および否定的な感情と負の関連がみられたことが報告されている⁹⁾。そのほかにも、インフォーマルな支援提供³⁴⁾やボランティア³⁵⁾は well-being を高める傾向にあるとされている³⁶⁾。本研究の女性における結果は、これらの先行研究と一致していた。

家庭外無償労働と well-being の関連が男性においてなかったことについて、第1に、仕事中心の人生を歩んできた者が多い世代とされる男性高齢者は、有償労働以外のプロダクティブな活動に対して満足感やその他の恩恵があまり得られず、well-being が上昇しにくい可能性がある。コントロール変数として投入した親しい友人・仲間数と well-being 指標との関連をみると、男性におけるプロダクティブな活動3領域のほとんどの分析結果において正の関連が示された一方で、女性においては関連を示した結果はまったくなかった(表3, 4)。これらのことから、男性高齢者の well-being を高める可能性のある活動は、家庭外無償労働というよりはむしろ有償労働、親しい友人や仲間を通じた活動であるというの

が現状なのかもしれない。第2に、別居親族の支援は、友人や近隣への支援やボランティアと比較して義務的な性格が強いために well-being を高める効果がほとんどない可能性があるため、他の活動の肯定的な効果を消失させたことが考えられる。杉原¹⁰⁾は、家族や親族への無償労働は生活満足度と負の関連、他人への支援提供は正の関連であったとしている。先の第1で述べたように、有償労働以外のプロダクティブな活動が男性の well-being を高める効果が強くないのであれば、別居親族の支援を含んで家庭外無償労働とした本研究ではその効果が消失した可能性がある。

プロダクティブな役割数と well-being の関連は、男性では主観的健康感とのあいだに正の関連、女性では主観的健康感ならびに生活満足度とのあいだに正の関連がみられた。Hinterlong ら⁸⁾の研究は男女別の検討ではないが、プロダクティブな役割数は3つの健康指標のうちの2つと正の関連を示しており、本研究もこれにおおむね一致したといえる。Hinterlong ら⁸⁾は、多重な役割が健康に恩恵をもたらすメカニズムとして、役割をもつことは、ストレスを緩和する重要な資源の入手をもたらすこと、名声や情緒的な満足感などが well-being を高めることをあげている。本研究の結果からそのメカニズムに言及はできないが、結果を解釈する際の参考となろう。

本研究の結果を概観すると、男性における有償労働およびプロダクティブな役割数と well-being の検討結果にみられるように、生活満足度には有意な関連が示されないが主観的健康感のみに関連が示されるという結果がみられた。本研究で使用した生活満足度(LSIK)²¹⁾は、高齢者の主観的幸福感を測定する尺度であり、人生全体についての満足感を含めた3因子構造となっている。これまでの人生も含めた満足度であるため、現在の生活に対する満足度が高くても、これまでの人生に対する満足度が低い場合は、生活満足度全体の得点が上昇しにくいといえる。したがって、well-being の2つの指標のうち生活満足度は、現在の健康状態をたずねる主観的健康感と比較して、プロダクティブな活動への関与の効果を敏感に反映しにくい可能性が考えられる。

本研究は、高齢者のプロダクティブな活動への関与が well-being に影響を与えるという分析モデルにより検討したが、本研究は横断研究であるためこの因果関係を検討することはできない。また、現実の高齢者の生活では、さまざまな要因によって生じた結果がまた要因となるものに影響を与えていくという循環的で非常に複雑な状況が生じていると思われる。そのため、プロダクティブな活動により well-

beingが高まった高齢者が、さらに意欲的にプロダクティブな活動に関与していくこともあろう。公衆衛生をはじめとする保健・医療・福祉分野の高齢者研究では、最終的に高齢者の well-being の向上を目指したもの、生活満足度などの主観的な well-being の指標をアウトカム指標として使用したものが多く¹²⁾。そのため、本研究においてもそれらの先行研究と同様に well-being をアウトカム指標とするモデルを用いた。ただし、今後は縦断研究により因果関係も含めた検討も行うこと、well-being の高い高齢者がプロダクティブな活動を行う傾向があるというモデルの検証も求められる。

本研究の結果をもとに、高齢者の well-being の向上と社会の活力低下防止の観点から主な点を述べる。労働人口が減少に転じているわが国において、就業意欲のある高齢者が有償労働に関与しやすい仕組みを構築することが求められる。家庭外無償労働は、活動内容により、保育や介護のサポート、地域の安全や美化の取り組みなど、地域社会にさまざまな恩恵をもたらす可能性を有している。とくに男性については、本研究では肯定的な効果がみられなかったため、男性のニーズと活動が適切に結びついていない可能性がある。親しい友人や仲間とともに参加してもらえるようなプロダクティブな活動を検討するなど、男性のニーズにあった活動参加が実現しやすいような方策を検討していくことが望まれる。

最後に、本研究の知見の限界について述べる。第1に、本研究は1つの地域の高齢者を対象にした横断的な研究である。知見の蓄積のために、今後、他地域における追試や縦断的な研究を行う必要がある。第2に、本研究の調査対象者1,500人に対し、有効回答数は771人(51.4%)、分析対象者は576人(38.4%)であった。心身の状態が悪いなどの理由で調査協力が得られない高齢者の存在が考えられるため、本研究の結果を解釈する際には、地域高齢者の状況をそのまま反映しているとはいえないことに留意する必要がある。第3に、本研究では well-being の指標として生活満足度と主観的健康感を使用した。Well-being の概念は広く、高齢者研究ではさまざまな指標が用いられており、使用指標により結果が多少異なる場合が考えられる。今後、より適切な指標の選択や高齢期の活動の効果がより敏感に反映される尺度はどのようなものかについても検討しながら、研究を積み重ねることが求められる。第4に、先述のとおり、就業と well-being の関連を検討した先行研究の結果は一致していない。本研究の結果は、研究上の限界があるため、知見の1つにすぎず決定的な知見とはいえない。今後、この関連に

ついでに精緻な検討も行っていく必要がある。

(受付 2008. 8.11)
(採用 2009. 6.24)

文 献

- 1) Butler RN, Gleason HP. Productive Aging: Enhancing Vitality in Later Life. New York: Springer, 1985.
- 2) Sherraden M, Morrow-Howell N, Hinterlong J, et al. Productive aging: Theoretical choices and directions. Morrow-Howell N, Hinterlong J, Sherraden M. Productive Aging: Concepts and Challenges. Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 2001; 260-284.
- 3) Herzog AR, Kahn RL, Morgan JN, et al. Age differences in productive activities. Journal of Gerontology: Social Sciences 1989; 44: S129-S138.
- 4) Bass SA, Caro FG. Productive aging: A conceptual framework. Morrow-Howell N, Hinterlong J, Sherraden M. Productive Aging: Concepts and Challenges. Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 2001; 37-78.
- 5) 岡本秀明. 高齢者のプロダクティブ・アクティビティに関連する要因: 有償労働, 家庭内および家庭外無償労働の3領域における男女別の検討. 老年社会科学 2008; 29: 526-538.
- 6) Caro FG, Bass SA, Chen Y-P. Introduction: Achieving a productive aging society. Bass SA, Caro FG, Chen Y-P. Achieving a Productive Aging Society. Westport: Auburn House, 1993; 3-25.
- 7) Baker LA, Cahalin LP, Gerst K, et al. Productive activities and subjective well-being among older adults: the influence of number of activities and time commitment. Social Indicators Research 2005; 73: 431-458.
- 8) Hinterlong JE, Morrow-Howell N, Rozario PA. Productive engagement and late life physical and mental health: findings from a nationally representative panel study. Research on Aging 2007; 29: 348-370.
- 9) McIntosh BR, Danigelis NL. Race, gender, and the relevance of productive activity for elders' affect. Journal of Gerontology: Social Sciences 1995; 50B: S229-S239.
- 10) 杉原陽子. 高齢者の社会的貢献の実態, 精神面への効果, および関連要因の検討. 東京都老人総合研究所, 編. 短期プロジェクト研究報告書 後期高齢期における健康・家族・経済のダイナミクス. 東京: 東京都老人総合研究所, 2002; 57-69.
- 11) Okun MA, Stock WA, Haring MJ, et al. The social activity/subjective well-being relation. Research on Aging 1984; 6: 45-65.
- 12) George LK. Perceived quality of life. Binstock RH, George LK. Handbook of Aging and the Social Sciences. 6th ed. San Diego: Academic Press, 2006; 320-336.
- 13) Sieber SD. Toward a theory of role accumulation. American Sociological Review 1974; 39: 567-578.
- 14) Adelman PK. Multiple roles and psychological well-being in a national sample of older adults. Journal of Gerontology: Social Sciences 1994; 49: S277-S285.

- 15) Danigelis NL, McIntosh BR. Resources and the productive activity of elders: race and gender as contexts. *Journal of Gerontology: Social Sciences* 1993; 48: S192-S203.
 - 16) Van Willigen M. Differential benefits of volunteering across the life course. *Journal of Gerontology: Social Sciences* 2000; 55B: S308-S318.
 - 17) 古谷野亘, 長田久雄. 実証研究の手引き: 調査と実験の進め方・まとめ方. 東京: ワールドプランニング, 1992; 28-31.
 - 18) Gall TL, Evans DR, Howard J. The retirement adjustment process: Changes in the well-being of male retirees across time. *Journal of Gerontology: Psychological Sciences* 1997; 52B: P110-P117.
 - 19) Morrow-Howell N, Hinterlong J, Rozario PA, et al. Effects of volunteering on the well-being of older adults. *Journal of Gerontology: Social Sciences* 2003; 58B: S137-S145.
 - 20) Morgan K, Bath PA. Customary physical activity and psychological wellbeing: a longitudinal study. *Age and Ageing* 1998; 27 Suppl 3: 35-40.
 - 21) 古谷野亘, 柴田 博, 芳賀 博, 他. 生活満足度尺度の構造: 因子構造の不変性. *老年社会科学* 1990; 12: 102-116.
 - 22) Kim JE, Moen P. Retirement transitions, gender, and psychological well-being: a life-course, ecological model. *Journal of Gerontology: Psychological Sciences* 2002; 57B: P212-P222.
 - 23) 岡本秀明, 岡田進一, 白澤政和. 農村部における高齢者の社会活動と生活満足度との関連: 社会活動に対する参加意向に着目して. *社会福祉学* 2005; 46: 63-73.
 - 24) 芳賀 博, 七田恵子, 永井晴美, 他. 健康度自己評価と社会・心理・身体的要因. *社会老年学* 1984; 20: 15-23.
 - 25) 直井道子. 都市居住高齢者の幸福感: 家族・親族・友人の果たす役割. *総合都市研究* 1990; 39: 149-159.
 - 26) 中村好一, 金子 勇, 河村優子, 他. 在宅高齢者の主観的健康感と関連する因子. *日本公衆衛生雑誌* 2002; 49: 409-416.
 - 27) 須貝孝一, 安村誠司, 藤田雅美, 他. 地域高齢者の生活全体に対する満足度とその関連要因. *日本公衆衛生雑誌* 1996; 43: 374-389.
 - 28) Larson R. Thirty years of research on the subjective well-being of older Americans. *Journal of Gerontology* 1978; 33: 109-125.
 - 29) 内閣府. 高齢社会白書 (平成19年版). 東京: ぎょうせい, 2007; 45-46.
 - 30) 厚生労働省. 就業者の状況 (平成16年高齢者就業実態調査結果の概況). 2005. <http://www.mhlw.go.jp/toukei/itiran/roudou/koyou/keitai/04/kekka-k2.html> (2008年8月2日アクセス可能).
 - 31) 杉澤秀博, 柴田 博. 職業からの引退への適応: 定年退職に着目して. *生きがい研究* 2006; 12: 73-96.
 - 32) Glass J, Fujimoto T. Housework, paid work, and depression among husbands and wives. *Journal of Health and Social Behavior* 1994; 35: 179-191.
 - 33) Menec VH. The relation between everyday activities and successful aging: a 6-year longitudinal study. *Journal of Gerontology: Social Sciences* 2003; 58B: S74-S82.
 - 34) Krause N, Herzog AR, Baker E. Providing support to others and well-being in later life. *Journal of Gerontology: Psychological Sciences* 1992; 47: P300-P311.
 - 35) Thoits PA, Hewitt LN. Volunteer work and well-being. *Journal of Health and Social Behavior* 2001; 42: 115-131.
 - 36) 藤原佳典, 杉原陽子, 新開省二. ボランティア活動が高齢者の心身の健康に及ぼす影響: 地域保健福祉における高齢者ボランティアの意義. *日本公衆衛生雑誌* 2005; 52: 293-307.
-

Productive activities and well-being among community-dwelling elderly

Hideaki OKAMOTO*

Key words : community-dwelling elderly, productive aging, productive activities, well-being, paid work, unpaid work

Objective This study examined the association between engagement in productive activities and well-being among community-dwelling elderly.

Methods Data for 576 older adults were obtained from a mail survey in Osaka City. The productive activities was measured with reference to three domains (paid work, unpaid work at home, and unpaid work outside the home) and the number of productive roles. Well-being was assessed by two measures: life satisfaction (LSIK) and self-rated health. The author used multivariate analyses with each of the two measures of well-being as dependent variables, and each of the productive activities as independent variables. The analyses were conducted separately for men and women, controlling for sociodemographic variables, IADL (instrumental activities of daily living) and social relationships.

Results Multivariate analyses revealed the following findings. Paid work was positively associated with life satisfaction of women and self-rated health of men and women. Unpaid work at home was not significantly associated with life satisfaction or self-rated health for either men or women. However, unpaid work outside the home was related to higher scores for life satisfaction and self-rated health among women. The numbers of productive roles were positively associated with life satisfaction of women and self-rated health of men and women.

Conclusion Productive engagement was generally beneficial to older women's well-being except for unpaid work at home. Among men, only paid work out of the three activity domains and the number of productive roles were associated with better self-rated health. Public health policies and programs that bring older women into productive engagement outside the home may thus improve their well-being and generate benefits for communities.

* Faculty of Human Ecology, Wayo Women's University